

2012年度博士学位論文(要旨)

中朝バイリンガルの言語意識
— 中国朝鮮族の社会言語環境からの考察 —

桜美林大学大学院 国際学研究科 環太平洋地域文化専攻

金 英実

目 次

序論

1. 研究の背景.....	1
2. 研究の目的.....	2
3. 研究の方法.....	2
4. 研究の枠組み	3
4.1 中朝バイリンガルに育った社会言語的要因に関する分析枠組み	3
(1) Conklin & Lourie(1983)の「言語シフト・言語保持理論」	3
(2) Landry & Allard (1992)の「巨視的モデル」	5
(3)金(2008a)の「中朝バイリンガルが育つ要因」	7
(4)本研究の分析枠組み	8
4.2 中朝バイリンガルの言語意識に関する分析枠組み	12
(1)調査協力者.....	13
(2)調査方法.....	13
(3)中朝バイリンガルの言語意識に関する分析枠組み(データの分析方法)	14
5. 本研究で用いる主要な用語の定義	16
(1)中朝バイリンガル	16
(2)言語意識.....	17
(3)漢語・普通話・中国語.....	18
(4)北朝鮮朝鮮語・韓国語・コリアン語・中国朝鮮語	19
(5)朝鮮人、北朝鮮人、韓国人、在日韓国人・朝鮮人、…中国朝鮮族	20
(6)アイデンティティ	21
(7)母語	22

本論..... 23

第1部 中朝バイリンガルが育った社会言語的要因..... 23

第1章 軍事政治的要因..... 25

1. 朝鮮人の中国への移住経緯..... 25

1.1 移住開始期(元の時代～18世紀)..... 25

1.2 日本〈植民地〉期以前(1869-1910)..... 26

1.3 日本〈植民地〉期(1910-1945)..... 26

1.4 日本〈植民地〉期以降(1945-1949).....27

1.5 考察.....	27
2. 中国国籍の付与以降.....	28
2.1 建国第1期(1949-1956).....	29
2.2 建国第2期(1956-1963).....	30
2.3 経済調整期(1963-1966).....	31
2.4 文化大革命期(1966-1976).....	32
2.5 改革開放期(1976-1992).....	32
2.6 考察.....	33
第2章 教育的要因.....	37
1. 中国の少数民族に認定される前.....	38
1.1 移住開始期(1883-1910).....	38
(1)第1期(1883-1905).....	38
(2)第2期(1905-1910).....	38
1.2 日本〈植民地〉期(1910-1945).....	39
1.3 国共内戦期(1945-1949).....	40
2. 中国の少数民族に認定された後.....	41
2.1 建国第1期(1949-1956).....	41
2.2 建国第2期(1956-1976).....	42
2.3 改革開放期(1976-1992).....	43
2.4 経済成長期(1992-2008).....	44
2.5 考察.....	44
第3章 言語文化的要因.....	48
1. 言語共同体の形成.....	48
1.1 朝鮮半島からの集団移住による朝鮮人コミュニティの形成.....	48
1.2 朝鮮族の行政組織(朝鮮族自治州・朝鮮族自治県・朝鮮族郷(村))の形成.....	48
1.3 国内大都市への移動による新たなコミュニティの形成.....	49
1.4 海外への移動による朝鮮族ネットワークの形成.....	50
1.4.1 韓国における朝鮮族ネットワーク.....	50
1.4.2 日本における朝鮮族ネットワーク.....	50
1.4.3 ロシアにおける朝鮮族ネットワーク.....	51
1.4.4 アメリカにおける朝鮮族ネットワーク.....	52
1.5 考察.....	52
2. 言語メディア.....	54
2.1 活字メディア.....	55
2.2 放送メディア.....	57
2.3 海外の言語メディア.....	58

2.4 考察.....	59
第2部 中朝バイリンガルの言語意識に関する事例.....	61
第1章 MA の事例	62
1. 中朝バイリンガルに育った要因.....	62
1.1 言語文化的要因.....	62
1.2 家庭的要因.....	62
1.3 教育的要因.....	63
1.4 考察.....	66
(1)朝鮮語を習得した要因	66
(2)中国語を習得した要因	68
2. MA の言語意識.....	70
2.1 朝鮮語に対する意識	70
2.2 考察.....	73
第2章 MB の事例	76
1. 中朝バイリンガルに育った要因.....	76
1.1 言語文化的要因.....	76
1.2 家庭的要因.....	76
1.3 教育的要因.....	77
1.4 考察.....	79
(1)朝鮮語を習得した要因	80
(2)中国語を習得した要因	81
2. MB の言語意識.....	83
2.1 朝鮮語に対する意識	83
2.2 考察.....	86
第3章 MC の事例	89
1. 中朝バイリンガルに育った要因.....	89
1.1 言語文化的要因.....	89
1.2 家庭的要因.....	90
1.3 教育的要因.....	92
1.4 考察.....	94
(1)朝鮮語を習得した要因	95
(2)中国語を習得した要因	97
2. MC の言語意識.....	98
2.1 朝鮮語に対する意識	98
2.2 考察.....	101

結論.....	104
1. 本研究のまとめ.....	104
第1部 中朝バイリンガルが育った社会言語的要因.....	104
第1章 軍事政治的要因.....	104
(1)朝鮮人の中国への移住実態.....	104
(2)中国国籍の付与および中国の「民族政策」.....	105
第2章 教育的要因.....	106
第3章 言語文化的要因.....	107
(1)朝鮮族共同体.....	107
(2)言語メディア.....	108
第2部 中朝バイリンガルの言語意識.....	109
第1章 二世(MA)の事例.....	109
(1)MAが中朝バイリンガルに育った要因.....	109
(2)MAの言語意識.....	110
第2章 三世(MB)の事例.....	111
(1)MBが中朝バイリンガルに育った要因.....	111
(2)MBの言語意識.....	112
第3章 四世(MC)の事例.....	112
(1)MCが中朝バイリンガルに育った要因.....	112
(2)MCの言語意識.....	113
2. 今後の中朝バイリンガルを支える複言語文化主義.....	114
3. 本研究の意義.....	116
4. 今後の課題.....	117
参考文献.....	i
資料.....	-1-
謝辞	

論文要旨

1. 研究の目的

本研究の目的は2つある。1つは、中国朝鮮族が中朝バイリンガルに育った社会言語的要因を史の変遷から分析考察することである。もう1つは、中朝バイリンガル個人の言語意識を分析考察することである。2つの目的の関係性について述べると、Landry & Allard(1992)が指摘しているように、バイリンガルに育つ社会言語環境が整備されていても実際に言語を使用するかどうかは、個人の特性や心理的な状況(言語意識)に左右され、バイリンガルの研究においては社会言語環境に加え、個人の心理的な部分を分析考察することが必要不可欠である。

2. 研究の方法

上述の2点の研究目的を解明するために、本論を2部構成にして論じた。第1部では、中国朝鮮族が中朝バイリンガルに育った社会言語的要因について論じた。1章では「軍事政治的要因」、2章では「教育的要因」、3章では「言語文化的要因」について分析考察した。第2部では、中朝バイリンガル個人の言語意識を分析考察した。1章では二世の言語意識、2章では三世の言語意識、3章では四世の言語意識について論じた。

3. 研究の枠組み

本研究の目的を解明するに当たり、理論的分析作業枠組み(以下分析枠組み)を構築した。以下に、その分析枠組みについて概略する。3.1では、中朝バイリンガルが育った社会言語的要因に関する分析枠組みについて、3.2では、中朝バイリンガルの言語意識に関わる分析枠組みについて述べる。

3.1 中朝バイリンガルが育った社会言語的要因に関する分析枠組み

中国朝鮮族が中朝バイリンガルに育った社会言語的要因の分析枠組みは、次の3種の枠組みを援用した。①Conklin & Lourie(1983)の「言語シフト・保持理論(Language Shift・Maintenance Theory)」②Landry & Allard(1992)の「巨視的モデル macroscopic model of the determinants of additive and subtractive bilingualism」③金(2008a)の「中朝バイリンガルに育つ要因」の3種である。この3種を援用し、中朝バイリンガルが育った要因を「軍事政治的」「教育的」「言語文化的」「家庭的」「個人的」要因の5つのカテゴリーに大別した。5つの要因をさらに、中朝バイリンガルの促進する「望ましい」要因と中朝バイリンガルの阻害する「望ましくない」要因に分類した。

この5つの要因の詳細な内容については、実証的データから構築する必要性があった。以下に、実証的データ収集に関する調査概要を述べる。調査方法は、文献調査・現地調査・

聞き取り調査の3つを併用した。文献調査について述べると、主に過去30年間行われてきた中国朝鮮族の移住史、教育史、文化史などに関する朝鮮語文献・中国語文献・日本語文献を調査した。現地調査については、朝鮮族の行政機関、教育局、教育現場を訪れ関連資料の提供を得た。加えて、朝鮮族学校の授業参観に行き現状の把握に努めた。聞き取り調査については、上述の現地調査の際には当局の責任者や現場の教師に、朝鮮族の政治や教育状況に関して聞き取り調査を行った。その他、多様な時代を生きた人々を年齢層別(一世・二世・三世・四世)に一人平均1時間程度の面談を実施した。聞き取りに協力した人数は合計40名(女性23名・男性17名)で面談の録音時間は約40時間である。面談を行った理由は、単なる文献や歴史的資料だけによらず、歴史の事実を確認し、実状をつぶさに把握することで本研究の考察の信頼性と説得力を高めるためであった。

3.2 中朝バイリンガルの言語意識に関する分析枠組み

先述の中朝バイリンガルが育った5つの要因のうち「個人的」要因は、個々人が置かれた文脈や個人が言語をどのように意味づけし働きかけていくのかといった言語意識に密接に関わるものである。それらを探るには、個人の内面に接近しその主体性を十分に考慮する必要があると考えられる。以下に、中朝バイリンガルの言語意識に関する分析枠組みを述べる前に、調査協力者・調査方法・調査期間を先述し、次に中朝バイリンガルの言語意識に関する分析枠組みについて述べる。

3.2.1 調査協力者・調査方法・調査期間

調査協力者は、10代～40代(調査時の年齢)の3名である。出身地状況から見ると、マジョリティ地域とマイノリティ地域出身の人々である。協力者の中には勉学または仕事の関係で出身地を離れ、中国国内の大都市に移動した経験を持つ人もいる。日本での留学を終え日本国内で生活している人もいる。

調査方法は、「対象者の意識の流れや内省を重視して、柔軟に対応していく非構造化インタビュー方法」(村岡 2002:127)を用いた。インタビューデータは、ICレコーダーに録音しすべて文字化を行った。インタビューデータの他に補足的データとして協力者との普段の接触、および電話・メールによる連絡内容をフィールドノートとして記録した。

調査期間は、2007年4月から2012年1月まで縦断的・継続的に行った。調査時の使用言語は、調査協力者の要求に応じて朝鮮語、中国語、日本語の3つの言語を使用した。インタビュー時間は、1回目は最長約2時間半、最短約1時間半である。2回目以降は平均30分程度である。

3.2.2 中朝バイリンガルの言語意識に関する分析枠組み(データの分析方法)

言語意識は個々人が置かれている文脈と密接に関連しているが、文脈(協力者が中朝バイリンガルに育った要因)を理解するための分析枠組は、グラウンデッド・セオリー・アプローチ

チを採用した。グラウンデッド・セオリー・アプローチは、データに基づいて分析を進め、データからカテゴリー(概念)を抽出し、カテゴリー同士の関係づけによって、理論を生成しようとする研究方法である。本研究では、調査協力者が置かれた文脈を理解するためにデータからまず、3つの「カテゴリー」を抽出した。「言語文化的要因」「家庭的要因」「教育的要因」の3つである。そこにマクロな要因として「政治的要因」を加え、最終的には、4つの「カテゴリー」に確定した。

言語意識に関する分析方法は、「解釈的アプローチ」に基づく。「解釈的アプローチ」は、人々が自分達の生活世界をどのように解釈しているのか、その意味を個々人の置かれた社会的文脈の中で探ることを目的とし、各人が意味世界を構築する具体的プロセスそのものの理解と、そこにマクロな諸力がどう投影しているかを読み解く(箕浦 1999:16-20)。本研究では例えば、「朝鮮語」に対して、「漢民族の前で話すのが怖かった」「怖くて話せなかった」「だから怖い」などの繰り返し表現に注目し、調査協力者が民族語の朝鮮語を「多数派の前では話すのが怖いことば」として意識していると解釈し、協力者の発言の中に出現した単語を用いてラベル名を付けた。さらに、なぜそのように意識しているのか、その理由を先述の個人が置かれている文脈との関係性から探った。

第1部 中朝バイリンガルが育った社会言語的要因

本研究の第1部では、中国朝鮮族社会の形成を通時的に概観し、中国朝鮮族が中朝バイリンガルに育った社会言語的要因を3つに分類して分析考察した。第1章では「軍事政治的要因」、第2章では「教育的要因」、第3章では「言語文化的要因」について論述した。以下に各章の内容を要約する。

【第1章 軍事政治的要因】

「軍事政治的要因」の史的変遷の時期区分は、①朝鮮人の中国への移住経緯、②中国国籍付与以降、の2つの時期に大別した。①に関しては、朝鮮人の中国への移住の実態を探るべく、その経緯を4つの時期¹に細分し考察した。②に関しては、中国国内の政治状況や、民族政策・言語政策の変遷が中朝バイリンガルが育つ過程でどのように機能したかを探るべく、5つ時期²に細分類し考察を行った。以下にその結果をまとめる。

まず、朝鮮人の中国への移住実態は、以下の4つに集約できる。①〈戦争捕虜〉による移住、②自国(朝鮮半島)の経済的貧困による移住、③移住先側(中国)の移住奨励による移住、④日本の植民地支配による移住の4つである。そのうち、①と④は、戦争や植民地支配に起因するディアスポラで中朝バイリンガルが生まれる過程において「望ましくない要因」

¹第1期は移住開始期(元の時代～18世紀)、第2期は日本〈植民地〉期以前(1869-1910)、第3期は日本〈植民地〉期(1910-1945)、第4期は日本〈植民地〉以降(1945-1949)である。

² ①建国第1期(1949-1956)、②建国第2期(1956-1963)、③経済調整期(1963-1966)、④文化大革命期(1966-1976)、⑤改革開放期(1976-1992)

として機能したことが明らかになった。ディアスポラの中朝バイリンガルの多くは、今も国家喪失・自己喪失・屈辱感や、家族離散、戦争によるストレスなどといった精神的苦痛を伴いながら二言語を使用していることが確認できた。②と③は、個人の自己判断による移住のように見えるが、自国(朝鮮半島)の政治腐敗や、飢餓に対する国の無策などによる余儀ない移住であり、究極のところ、中朝バイリンガルを阻害する「望ましくない要因」として機能したことが示された。かれらは、最終的には「想像の国」(アンダーソン:1997)への帰還を切望するという本質主義的なエスニシティや、ナショナリティへの帰属意識が強く、民族の言語文化に対する情意的な執着が強かったことが示唆された。

次に、朝鮮人が中国へ移住した後、かれら、およびかれらの子弟が二世・三世にわたって民族語の朝鮮語を保持可能であったのは、中国の国籍が付与されたことおよび、中国の「民族政策」が重要な役割を果たしていたことが明らかになった。まず、移住先(中国)の国籍が付与されたことによって、身分保障が確保され中国の政治に参画する権利が与えられた。「民族政策」の役割については、中国朝鮮族の民族語の維持と使用を「個人の権利」、または「言語集団の権利」として保障していた。こうした法制度の存在自体は、中朝バイリンガルを促進する「望ましい要因」として働きかけていた。しかしながら、「民族政策」がいかなる理念に依拠するかによっては、「望ましい要因」として機能したり、「望ましくない要因」として機能したりといった揺れ動きがあったことが浮き彫りになった。すなわち、①朝鮮語が保護された時期、②朝鮮語が軽視された時期、③朝鮮語が多数派言語に急速に移行させられた時期の3つの揺れ動きがあった。

【第2章 教育的要因】

「教育的要因」の通時的区分は、まず、①中国の少数民族に認定される前、②中国の少数民族に認定された後の、2つに大別した。次に、それぞれの時期を3つの時期³と4つの時期⁴に細分類して論述した。以下にその結果をまとめる。

中国朝鮮族が中朝バイリンガルに育った重要な要因の1つは、民族教育機関が幼稚園から大学院まで体系的に整備されているからである。この民族学校は、民族アイデンティティ構築の重要な要素である言語文化を継承し、民族アイデンティティを確立する上で「望ましい要因」として機能していた。しかしながら、教育の目的によっては、以下のような複雑な現象が出現したことが明らかになった。①他民族(日本)に対する敵対意識を煽るような教育が行われた時期、②民族の言語文化を継承しつつ、多数派の言語文化を取り入れるといった「維持型バイリンガル教育」が行われた時期、③民族語を多数派言語の中国語に移行させるような「移行型バイリンガル教育」が進められた時期の3つである。

①について、日本の〈植民地〉期に民族学校で行われた教育は、民族の言語文化や民族

³ ①移住開始期(1883-1910)、②日本〈植民地〉期(1910-1945)、③国共内戦期(1945-1949)の3つである。

⁴ ①建国第1期(1949-1956)、②建国第2期(1956-1976)、③改革開放期(1976-1992)、④経済成長期(1992-2008)の4つである。

アイデンティティを必要以上に強化したあまり、戦争を終結させることや、平和を目指す教育とは相反する教育が行われていた。すなわち、日本に敵対しかれらを排除するための軍事的な教育に傾斜していた。

②について、民族語の朝鮮語が幼稚園から高等教育終了段階まで教育媒介語として継続的に使用され、母国(朝鮮半島)で出版された「朝鮮地理」「朝鮮史」や、朝鮮の文学作品などを取り寄せ、民族アイデンティティの高揚のために活用していた。他方、言語科目としての中国語の授業時間を朝鮮語の授業時間と均等に設置し、多数派の言語文化状況を理解するためのカリキュラムが設置されていた。

③については、〈強者(植民者・多数派)〉が強制的に移行したか、自民族自らが「進んで」移行したかにより2つに分けられる。〈強者〉が進めたことに関しては、教室内で一時的には民族語の使用を許可するが、徐々に民族語の使用を制限しながら〈強者〉の言語の使用を増やし、最終的には民族語を〈強者〉の言語に移行させた。自民族自らが「進んで」行ったことに関しては、社会的に優勢な多数派言語を優先し、学校の教育言語や使用言語を中国語に替えるなど、自ら民族語を捨て多数派の言語へ徐々に移行するという自己規制によるものである。

以上、中朝バイリンガルが育った「教育的要因」からは、多数派のバイリンガル教育は一方の極に振れると、自らの言語文化を過度に重要視し、他者の言語文化を必要以上に排除することになりかねないことが示唆された。また、それを避けようとする、今度は多数派への同化を促すことになりかねず、極めて繊細なバランス感覚が必要とされることが示された。

【第3章 言語文化的要因】

「言語文化的」要因では、朝鮮族共同体、および朝鮮族の言語メディアの2つについて論述した。朝鮮族共同体に関しては、時代の経過に伴い共同体内部の言語文化状況は変化し続けているが、その変化を探るべく、次も4つに分類した。①朝鮮半島からの集団移住による朝鮮人コミュニティ、②中国朝鮮族の行政組織、③中国国内の大都市への移動による新たな朝鮮族コミュニティ、④海外の移動による朝鮮族ネットワークの4つである。その結果、朝鮮族共同体(コミュニティ)の形成は、朝鮮語がコミュニティ言語として活力を発揮するようにし、中朝バイリンガルが育つ上で欠かせない役割を果たしていたことが明らかになった。しかしながら、今日の朝鮮族の大規模な移動により、中国朝鮮族共同体は解体されつつある。今後中国朝鮮族は民族語使用の基盤となる共同体を失うことが懸念される。

言語メディアに関しては、①活字メディア、②放送メディア、③海外におけるメディアの3つを取りあげた。分析の結果、中国朝鮮族は、少数派でありながら、多種多量の言語メディアを編集・発行・利用する権利が保障されていることが確認できた。これは、中朝バイリンガルを促進する「望ましい要因」である。しかしながら、言語メディアの内容を観ると、まず、自・他者・個の言語文化状況より、経済状況や政治状況の発信・受信に傾

斜していた。次に、多数派の政策に同調する傾向が強く、多数派への統合を促すようなメッセージが隠されていた。朝鮮族の言語メディアからは、当該民族の言語を用いたとしても、その内容が多数派への統合を促すなどといった意図が隠されていると、決して当該民族の言語メディアとは言えないことが示唆された。それに対し、多数派言語あるいはその他の言語を使用しても、当該民族の言語文化を発信するために、または当該民族と他民族を繋ぐためになどといった意図が存在すれば、当該民族の言語メディアとして位置付けることが可能であることが示された。

第2部 中朝バイリンガル個人の言語意識

第2部では、中朝バイリンガルが育った個人的要因を個人の言語意識に着目し分析考察した。1章では中国朝鮮族二世(MA)の事例、2章では三世(MB)の事例、3章では四世(MC)の事例を考察した。各章ではまず、調査協力者が中朝バイリンガルに育った要因(文脈)を「言語文化的」「家庭的」「教育的」要因の3つに分類し分析した。考察の際には「政治的」要因との関連性についても言及した。次に、調査協力者の言語意識を民族語の朝鮮語に着目し、分析考察した。以下に、その結果をまとめる。

【第1章 二世(MA)の事例】

1. MAが中朝バイリンガルに育った要因

「言語文化的要因」について述べると、MAの出身地は人口約1500人の小規模の朝鮮族共同体(朝鮮族村)である。しかしながら、朝鮮語がコミュニティ言語として活力を発揮しており、民族の生活様式や民族アイデンティティが重要視されていた。それは、共同体成員の大多数がディアスポラの一世代で母語を「民族の根源」として認識しており、民族のアイデンティティが母語・母文化と強く結びついていたのである。MAは14歳の時には、多数派地域へ移動し、漢民族と日常的に豊富に接触する言語環境に置かれていたため、自然な文脈における中国語習得・使用がなされていた。

「家庭的要因」について考えると、MAの家庭内での朝鮮語習得は無意識的かつ自然な言語獲得であった。それは、祖父母と両親の朝鮮語に対する情意面との関連が強かった。MAの祖父母と両親は自らが民族語を一度否定され、禁止された経験を持つディアスポラの人々であった。そのため、家庭内では朝鮮語使用を強く強調していた。家庭内における中国語習得について見てみると、MAの父親は家庭内で中国語の重要性を強調してはいたが、中国語学習に必要な言語リソースを提供するなど実質的な支援は行わなかった。MA自身は中国語の実用性にかかわる意識が薄く、中国語の習得に取り組むことはなかった。なお、70年代～80年代の当時、中国の家庭内にテレビという情報メディアは普及しておらず、家庭内で機器メディアを通して中国語や中国全土にわたる情報に接触する機会が極端に少なかった。

「教育的要因」について、MA が通っていた朝鮮族学校の教育形態は、少数派生徒の民族語を伸ばし文化的アイデンティティを強化することを目指すもので、そこで行われていたバイリンガル教育は、「発展維持型」バイリンガル教育であった。授業に使用される教育言語の割合は 100%朝鮮語であった。MA は、中学校まで民族学校に通い、思考や概念、技能、知識が朝鮮語で十分に構築されていた。14 才の時には、多数派の師範大学へ進学し、師範大学というアカデミックな教育領域で、言語からコミュニケーション、実質行動まで総合的かつ広範な「アカデミック・インターアクション」能力を身に付けていた。

「政治的要因」について、MA が生まれ育った朝鮮族村、および MA が通っていた朝鮮族学校の存在は、中国の「民族政策」と不可分な関係にある。国が法制上少人数の少数民族言語集団をも「朝鮮族の行政組織」に認め、そこに民族学校を設立し、民族の言語の保持・育成を支援しているのである。一方、MA が 14 才の時に師範大学に入学し中国語で教育を受けるようになったのは、中国の教育政策によるものであった。MA が中学校 3 年生の時、中国国内で小中学校の教師を養成する 4 年制師範大学がはじめて開校されたが、MA の生まれ育った県内で高校受験成績が上位 3 位以内の生徒が選ばれることに決まっていた。選ばれた入学生に対しては国が在籍期間の学費、生活費をすべて負担するという〈優遇政策〉を実施していた。

2. MA の言語意識

MA の朝鮮語に対する意識は次の 6 つの段階の変容があった。①「なにげなく使ったことば」②「漢民族の前では話すのが怖くて恥ずかしいことば」③「誰も聞き取れず役に立たないことば」④「祖父母と両親にとっては特別なことば」⑤「漢民族の前でも堂々と話せることば」⑥「奥深いことば」の 6 つである。

朝鮮語を否定的に捉えていた主な理由は、2 つ挙げられる。1 つは、多数派集団との接触によって、無意識的に使用してきた母語が少数言語であることに気づき、朝鮮語使用に葛藤や逃避が生じたからである。もう 1 つは、周囲の多数派から「社会に取り残された少数派」といった差別的なレッテルを貼られ、少数派としての社会的劣位の立場を内面化し劣等感を持つようになったからである。

朝鮮語を肯定的に捉えるようになった主な理由は、2 点挙げられる。1 点目は、韓国の経済力と大衆文化の影響で、多数派側が朝鮮族の人々を中国社会の成員として認めるようになったからである。2 点目は、多数派の大学で「韓国語」を教える経験を通して、朝鮮語の言語そのものの形式、機能を分析的に理解するようになり、朝鮮語を保持したことに誇りを持つようになったからである。

【第 2 章 三世(MB)の事例】

1. MB が中朝バイリンガルに育った要因

「言語文化的要因」について、MB の出身地は朝鮮族自治州であるが、朝鮮族の人口比率

は多数派の人口をやや下回っていた。しかし、朝鮮語が公用語として用いられており、朝鮮語を使用して政治、経済、文化的自治を行う権利が保障されていた。このような民族語の活力によって MB は、自民族の言語文化に誇りを持ちながら朝鮮語を使用していた。中国語の習得について述べると、出身地に多数派の漢民族が多数居住していたため、幼児の時から日常的に豊富に中国語に接触していた。MB は 14 才の時は、多数派コミュニティへ移動していた。移動後、多数派グループに好意を持ち「十全的参加」が可能であったことから、中国語の談話能力が急速に向上していた。

「家庭的要因」について、MB の両親は、MB が幼児の時から家庭内で朝鮮語と中国語の二言語習得を支援していた。ただし、民族語と民族アイデンティティを最も重要視し、使用言語は朝鮮語に制限していた。このような民族語を最優先に考える両親の「家庭内言語政策」により、家庭内で朝鮮語を使用することは、MB にとって当然のことになっていた。中国語は受容のみに止めていたが、マスメディアを利用し中国語を「聞く」ことを日課として課していた。このような両親の支援によって、MB は幼児の時から中国語の「聞く」技能が発達しており、中学校を卒業する時には、中国語によるニュースの内容が理解できる中国語力を習得していた。

「教育的要因」について、MB が中学校まで通っていた朝鮮族学校では朝鮮語が教育言語として用いられており、朝鮮語の授業が重視されていた。さらに、学校側は朝鮮族自治州という言語文化的優勢をアイデンティティ教材(民族博物館を活用するなど)として活用し、民族アイデンティティの高揚と知的活動を促進していた。このような教育環境は、MB の朝鮮語の 4 技能の発達や、朝鮮語による思考力および民族アイデンティティの確立を促していた。MB は 14 才の時は、多数派の短期大学へ入学したが、教科に関わる学習活動に参加できる言語能力や、高度な認知力を必要とするアカデミックな言語能力を習得していた。

「政治的要因」について、MB の出身地が朝鮮族自治州に認定され、少数民族の言語生活は保障されているのは、中国の「民族政策」と密接な関連がある。国が特定の少数民族の居住地(朝鮮族自治州)において少数派の言語が政治、経済、文化的に活力を持つように支援することによって、多数派言語・少数言語が支配・被支配関係によって階層化されるといった社会構造の問題を越えて社会的に公平な人間関係を構築していくように促進しているのである。

2. MB の言語意識

MB の朝鮮語に対する意識は 5 つの段階の変容が見られた。①「朝鮮語を話すのは当然のこと」②「重荷になることば」③「中国語がいくらできても母語(朝鮮語)ができないと意味がない」④「朝鮮族であることを忘れないように戒める」⑤「子供ができれば必ず朝鮮族学校に通わせる」の 5 つである。

朝鮮語を否定的に捉えた理由は主に 2 点考えられる。1 点目は、朝鮮語は朝鮮族自治州内ではそれを使用する言語権を有するが、境界を越えて多数派の地域に入ればその言語権を

失うことを認識するようになったからである。2点目は、経済的により豊かな生活を送るためには、朝鮮語より中国語のほうがより実用性の高い言語であると捉え、言語の実用性によって、2つの言語に優劣をつけていたからである。

朝鮮語を肯定的捉えるようになった理由は、主に2点挙げられる。1つは、朝鮮族グループから3年間離れ、再びそのグループに戻ってはじめて、朝鮮語は自分の人的ネットワークに必要不可欠な言語であることに気付き、朝鮮語の実用性と情意面の両方を客観的に分析するようになったからである。もう1つは、複数の言語を習得し使用することを通して、複数の言語の習得は、単なる実利的な面のみならず、物事をより柔軟に捉え、他者に対して寛容な姿勢になれるなど人格形成に貢献し、より豊かな人生を送ることにつながると考えるようになったからである。

【第3章 四世(MC)の事例】

1. MCが中朝バイリンガルに育った要因

「言語文化的要因」について、MCは多数派集団に生まれ育ち、多数派集団への移動を繰り返していたにも関わらず、民族語の朝鮮語を継承している。それは、「言語習得の分水嶺」と考えられる8才まで民族語の朝鮮語がしっかりと確立されていた⁵からであった。一方、MCは中国語の普通話に加え、山東語と広東語の2つの地域方言を習得し使用している。それは、MCが8才の時に移動した中国の産業都市烟台、および12才の時に移動した中国の経済特別開発区の深圳においては、コミュニティ言語は共通語の普通話に加え、それぞれの地域方言の山東語・広東語が併用されている状況であったからだ。

「家庭的要因」について、MCの両親は、8才の時から多数派教育を受けることになったMCに対し、彼女の民族語継承を目指して家庭内で継続的な支援を行っていた。その支援は3段階に分けることができる。①家庭内で中国語使用を禁止し、朝鮮語の知的ことばを増やす支援を行った段階⁶、②中国語使用を制限せず、朝鮮語を使用する接触場面を増やした段階⁷、③韓国メディアを活用し支援を行った段階⁸の、3つである。

「教育的要因」について見ていくと、MCが8才まで通っていた朝鮮族学校では、朝鮮語の維持・促進に力を注いでいた。これによって、MCは軸となる第一言語の基礎の言語能力や、概念化および思考力が確立していた。一方、MCは小学校2年生の時から高校まで11年間にわたって多数派学校で教育を受けたため、中国語の教科学習言語能力が発達してお

⁵ MBが8才までに生活拠点としていた多数派地域には朝鮮族が多数(約2万人)居住していたが、かれらは自ら民族語や民族の生活様式の継承を目指す活動を展開するなど、エスニック・グループを形成し、民族同士の交流を深めていた。子弟の三世・四世にも参加させ、民族の言語文化の継承を促していた。

⁶ 支援方法として学校の宿題を朝鮮語に訳し意識的に繰り返したり、日課として朝鮮語の読本を読み聞かしていた。

⁷ MCは中国語の言語能力の向上に伴い中国語を使用する傾向が強まっていた。両親は中国語使用を制限するとMCが心理的束縛を感じ両親と話さなくなることを懸念し、定期的に長期間祖母の暮らす朝鮮族村に遊びに行かせることを通して、朝鮮語の理解語彙を増やすのに加え、朝鮮語の社会化を促していた。

⁸ 中学校へ進学してからMCは、韓国のドラマに関心を持っていた。両親は韓国ドラマをMCの認知面を刺激する「言語文化の学習」リソースとして捉え、単にMCが受動的にメディアを鑑賞するのではなく、質問を投げかけるなどを通して、MCの朝鮮語による表現や、批判的な思考力を育てていた。

り、思考も中国語で行っている。

「政治的要因」について見てみると、MC が中国語の普通話に加え、地域言語を習得し使用するようになったのは、直接的には両親の移動に関連するが、間接的には中国の「改革開放政策」が関わっている。中国政府は 80 年代の半ばに中国国内の沿海部の都市を開放し、対外貿易都市の拡大を図った。90 年代に入ると、市場経済の原理を導入し、国営企業や個人企業という新たな資本主義的な形態の企業の設立を奨励し、改革開放政策の普及を加速化したのと同時に従来制限していた地域間の人口移動を許可したのである。

2. MC の言語意識

MC の朝鮮語に対する意識は 5 つの段階に分類される。①「普通に話したことば」②「外では役に立たないことば」③「役に立つことば」④「忘れてはいけないことば」⑤「漢民族と朝鮮族は同じ」の 5 つである。

朝鮮語を否定的に捉えていた理由は、主に 2 点挙げられる。1 点目は、両親の移動により、接触場面における使用言語が朝鮮語から中国語へ変化したことで、朝鮮語の使用範囲の限界に気付いたからである。2 点目は、一時的に中国語によるインターアクションが十分になされず、級友に疎外される経験をしたからである。ただし、MC はことばの社会的格差などで劣等感を抱くことはなかった⁹。

朝鮮語を肯定的に捉えるようになった理由は、主に 2 つ考えられる。1 つは、朝鮮語が話せるとより高く評価される(多数派に羨ましがられる)経験をしたからである。もう 1 つは、朝鮮語が話せることで将来の職業の選択肢が広がることに気づいたからである。

なお、MC の「漢民族と朝鮮族は同じ」という認識について、この発言は MC が文化を一極化しているように見えるが、これは、母親が多数派(漢民族)と少数派(朝鮮族)の文化の違いについて、ステレオタイプ的な意見を述べているのに対し、文化の区別は「民族」という固定的なカテゴリーで捉えることは妥当ではなく、「個々人の違い」として捉えるべきだという自分自身の考え方を示したものである。それは、中国国内の 3 つの都市を行き来するなか、多様な地域方言や文化を持つ人々との接触を通して、言語文化の違いは「漢民族」や「朝鮮族」など、「民族」といった概念で解釈することはできず、「個人」というカテゴリーで捉えるべきであることを経験的に理解していたからである。

【本研究の意義】

本研究の意義は、3 点に集約できる。1 点目は、中国朝鮮族が中朝バイリンガルに育った社会言語的要因の理論的分析枠組みを構築し、それを採用し研究課題を解明したことである。2 点目は、中朝バイリンガルの言語意識の理論的分析枠組みを構築し、複雑な事象が多

⁹ その理由は 2 つ考えられる。1 つは、MC が在籍していたクラスには地域方言を母語とする生徒が過半数を占めており、彼ら自身多様な言語文化を持つため、MC を少数派として区別したり、少数派という差別的なレッテルを貼ったりしなかった。もう 1 つの理由は、移動先に朝鮮族タウンが形成されており、韓国の大衆文化に興味関心を持つ漢民族の注目を集めていたことから、MC は朝鮮族の言語文化の地位が社会的に低いと捉えることはなかった。

層的に絡まり合う質的データを、論理的に分析考察し、研究課題が解明できたことである。

3点目は、日本のバイリンガル教育に参考となる資料を提供できたことである。

1点目について、本研究は、文献調査に加えて、現地調査、聞き取り調査を基に、中国朝鮮族が中朝バイリンガルに育つ社会言語的要因の枠組みを構築した。これによって、朝鮮族の言語習得・使用を重層的な考察に導くことができた。この理論的分析枠組みは、失われる可能性が高いと懸念されている中国朝鮮語の維持にむけた方策を議論する際にも、有効な枠組みとして援用可能であると考ええる。また、社会言語学における少数言語に関わる研究領域に参考となる資料が提供できたと考える。

2点目について、言語意識は、個人が置かれている文脈の中から捉えるべきであり、ダイナミックに変容するものである。本研究は、言語意識の枠組みを構築したことで、ダイナミックに変容する中国朝鮮族の言語意識を重層的に考察することができた。社会言語学の多岐にわたる学術領域のなかで、複言語話者の言語意識に関わる研究は依然として少ないようである。本研究の中国朝鮮族の言語意識の理論的枠組み、分析手法、考察結果などが、この研究領域にささやかな貢献ができると考える。

3点目について、文部科学省(2009)の調査によると、日本の公立の小・中・高等学校等に在籍する日本語指導が必要な外国人児童生徒は28,575人であるという。今後日本社会においては、外国人労働者の雇用などの増加に伴い外国人児童が増加すると推測されるが、本研究の中朝バイリンガルが育った社会言語的要因の理論的枠組みが、今後の日本のバイリンガル教育においても、参照枠組みとして使用可能であると考ええる。

【今後の課題】

今後の課題は3つある。まず、中朝バイリンガルが育った社会言語的要因には「経済的」「思想的」「宗教的」要因も関連していると考えられる。これらの要因について分析考察を行い、本研究で示した要因の枠組みに追加する。次に、中国の少数民族政策の過去、現在、今後の目的・目標を調査することである。最後に、中国の少数民族研究者と連帯し、中国朝鮮族以外の、少数民族の言語文化状況を調査することである。

主要参考文献

<日本語文献>

- 浅井亜紀子(2002)「文化移動に伴うインド人留学生の自己再構築－身体化した自己と受容認知の視点から－」『異文化コミュニケーション学会 SIETAR JAPAN』No.5 異文化コミュニケーション学会
- 浅井亜紀子(2006)『異文化接触における文化的アイデンティティのゆらぎ』ミネルヴァ書房
- 東照二(2000a)『バイリンガリズム－二言語併用はいかに可能か－』講談社
- 東照二(2000b)「個人にとってのバイリンガリズム, 社会にとってのバイリンガリズム」『バイリンガリズム－日本と世界の連帯を求めて－』pp.6-14 国立国語研究所
- 東照二(2002)「多言語・多文化共生社会における言語政策」『多言語多文化共生社会における言語問題』国立国語研究所
- 東照二(2009)『社会言語学入門－生きた言葉のおもしろさに迫る－【改訂版】』研究社
- アパデュライ, アルジュン著, 門田健一訳(2004)『さまよえる近代－グローバル化の文化研究－』平凡社
- アンダーソン, ベネディクト著, 白石さや・白石隆訳(1997)『想像の共同体－ナショナリズムの起源と流行－【増補】』NTT出版株式会社
- アンダーソン, ベネディクト著, 白石さや・白石隆訳(2007)『定本想像の共同体－ナショナリズムの起源と流行－』図書新聞
- 任榮哲(1993)『在日・在米韓国人および韓国人の言語生活の実態』くろしお出版
- 任榮哲(2005)「在外韓国人の言語生活」『在日コリアンの言語相』pp.53-86 和泉書院
- 植田晃次(1996)「中国の朝鮮語規範化文献にみる規範語制定者の「規範語」観」『国際開発研究フォーラム』No.6 pp.271-282 国際開発研究
- 植田晃次(2000)「1990年代中国の朝鮮語規範化と語彙規範の問題点」『言語文化研究』No.26 pp.399-415 大阪大学大学院言語文化研究科
- 植田博之(1992)「朝鮮語」『言語学大辞典』第2巻 三省堂
- 植田博之(1993)「延辺朝鮮語の音韻」『言語文化接触に関する研究』共同研究報告第6号 pp.131-145 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
- 大村益夫(1988)『中国朝鮮族とその言語状況』高麗大学出版部
- 岡崎敏雄(2009)『言語生態学と言語教育－人間の存在を支えるものとしての言語－』凡人社
- 岡本雅享(1999)『中国の少数民族教育と言語政策』社会評論社
- 岡本雅享(2001)「中国のマイノリティ政策と国際基準」『現代中国の構造変動』第7巻 東京大学出版社
- 岡本雅享(2008)『中国の少数民族教育と言語政策【増補改訂版】』社会評論社
- 小川佳万(2001)『社会主義中国の少数民族教育』東信堂

- 小川原宏幸(2010)『伊藤博文の韓国合併構想と朝鮮社会－王権論の相克－』岩波書店
- 生越直樹(2005)「在日コリアンの言語使用意識」『在日コリアンの言語相』 pp.11-52 和泉書院
- 小野原信善(2004a)「フィリピン上流階級子弟に見る言語使用と言語的アイデンティティーアンケート調査から－」『アジア英語研究』第6号 日本アジア英語学会
- 小野原信善・大原始子(2004b)『ことばとアイデンティティーことばの選択と使用を通して見る現代人の自分探し－』三元社
- かどや・ひでのり(2006)「言語権から計画言語へ」『ことば/権力/差別－言語権から見た情報弱者の解放－』三元社
- 荻谷剛彦(1995)『大衆教育社会のゆくえ－学歴主義と平等神話の戦後史－』中公新書
- カミンズ, ジム・ダネシ, マルセル著, 中島和子・高垣俊之訳(2005)『カナダの継承語教育－多文化・多言語主義をめざして－』明石書店
- カミンズ, ジム著, 中島和子訳 (2011)『言語マイノリティを支える教育』慶応義塾大学出版会株式会社
- 姜尚中(2006)「コリアン・ネットワークの構築と東北アジア共同の家」『朝鮮族のグローバル移動と国際ネットワーク－「アジア人」としてのアイデンティティを求めて－』アジア経済文化研究所
- 金英実(2008a)「中朝バイリンガルの言語文化的背景」『桜美林国際学論集 マジス(Magis)』第13号 pp.71-82 桜美林大学大学院国際学研究科
- 金英実(2012a)「中朝バイリンガルが成立した教育的要因－民族学校教育を中心に－」『東京言語文化研究会(TALCE)』第2号 pp.61-70 東京言語文化教育研究会
- 金英実(2012b)「中朝バイリンガルの言語意識に関する事例研究－朝鮮語に対する意識を中心に－」『言語教育研究』第2号 pp.21-30 桜美林大学大学院言語教育研究科
- 金英実(2013)「中朝バイリンガルの中国語習得に関する事例－多数派グループへの参加過程に着目して－」『言語教育研究』第3号 (印刷中) 桜美林大学大学院言語教育研究科
- 権寧俊(2005)「朝鮮人の『民族教育』から朝鮮族の『少数民族教育』へ」『文教大学国際学部紀要』第15巻2号 pp.175-203 文教大学国際学部
- 言語権研究会編(1999)『ことばへの権利－言語権とはなにか－』三元社
- 戈木クレイグヒル慈子(2005)『質的研究方法ゼミナール－グラウンデッド セオリー アプローチを学ぶ－【増補版】』医学書院
- 戈木クレイグヒル慈子(2006)『グラウンデッド・セオリー・アプローチ－理論を生み出すまで－』新曜社
- 戈木クレイグヒル慈子(2008)『グラウンデッド・セオリー・アプローチ－現象をとらえる－』新曜社
- 戈木クレイグヒル慈子(2010)『グラウンデッド・セオリー・アプローチ－実践ワークブッカー』日本看護協会出版会
- 真田信治他(1992)『社会言語学』おうふう
- 真田信治・庄司博史(2005)『事典 日本の多言語社会』岩波書店
- 真田信治(2006)『社会言語学の展望』くろしお出版

- 白水繁彦(2004)『エスニック・メディア研究-越境・多文化・アイデンティティ-』明石書店
- 徐京植(1997)『分断を生きる』影書房
- 徐京植(2005)『ディアスポラ紀行-追放された者のまなざし-』岩波新書
- 戴エイカ(1999)『多文化主義とディアスポラ』明石書店
- 戴エイカ他(2009)『批判的ディアスポラ論とマイノリティ』明石書店
- 高崎宗司(1996)『中国朝鮮族-歴史・生活・文化・民族教育-』明石書店
- 竹中憲一(2000)『「満州」における教育の基礎的研究』第5巻 柏書房
- 田中望・斎藤里美(1993)『日本語教育の理論と実際-学習支援システムの開発-』大修館書店
- 陳於華 (chen yuhua)(2005)『中国の地域社会と標準語-南中国を中心に-』三元社
- 中島和子(1992)「バイリンガル児のアイデンティティの獲得」月刊『言語』大修館書店
- 中島和子(1998)『バイリンガル教育の方法-12歳までに親と教師ができること-』アルク
- 中島和子(2001)『バイリンガル教育の方法-12歳までに親と教師ができること-【増補改訂版】』アルク
- 中島和子(2006)「多文化多言語主義・アイデンティティ」『講座・日本語教育学 第2巻 言語行動と社会・文化』スリーエーネットワーク
- 中島和子(2010)『マルチリンガル教育への招待-言語資源としての外国人・日本人年少者-』ひつじ書房
- 日本語教育学会(2005)『新版日本語教育辞典』大修館書店
- 野口道彦(2009a)「ディアスポラとしての中上健次-虚構の「路地」と現実の被差別部落-」『批判的ディアスポラ論とマイノリティ』明石書店
- 野口道彦(2009b)「ディアスポラと部落、そしてパラダイムの転換」『批判的ディアスポラ論とマイノリティ』明石書店
- 野口道彦(2009c)「ディアスポラと部落問題、そして移民問題」『批判的ディアスポラ論とマイノリティ』明石書店
- 拝田清(2009)「英語教育実用論を問い直す-目的論の進化に向けて-」『言語文化教育研究 (TALCE) 紀要』創刊号 東京言語文化教育研究会
- 拝田清(2011)「日本の外国語教育における複言語主義導入の妥当性-CEFR の理念と実際から-」『言語教育研究』創刊号 pp.1-12 桜美林大学大学院言語教育研究科
- ハーディング=エッシュ, イーディス & ライリー, フィリップ著, 山本雅代訳(2006)「バイリンガルファミリー: こどもをバイリンガルに育てようとする親のための手引き」明石書店
- 藤井(宮西)久美子(2003)『近現代中国における言語政策-文字改革を中心に-』三本社
- ベーカー・コリン著, 岡秀夫訳・編(1996)『バイリンガル教育と第二言語習得』大修館
- ホール, スチュアート著, 小笠原博毅訳(1997)「文化的アイデンティティとディアスポラ」『現代思想』26(4) pp.90-102 青土社
- ホール, スチュアート著, 宇波彰訳(2001)「誰がアイデンティティを必要とするのか」『カルチュラ

- ル・アイデンティティの諸問題』 pp.7-35 木村書店
- 細川英雄(2002)『日本語教育は何をめざすか—言語文化活動の理論と実践』明石書店
- 細川英雄(2003)『『個の文化』再論—日本語教育における言語文化教育の意味と課題』『21世紀の「日本事情」5』 pp.36-51 くろしお出版
- 細川英雄(2010)「議論形成の場としての複言語・複文化主義—言語教育における海外理論の受容とその文脈化をめぐる—」『複言語・複文化主義とは何か—ヨーロッパの理念・状況から日本における受容・文脈化へ—』 pp.148-159 くろしお出版
- ましこ・ひでのり(2006)「言語権の社会的意義」『ことば/権力/差別—言語権から見た情報弱者の解放—』三元社
- 箕浦康子(1981)「アメリカ文化との接触が日本人の家庭生活と子供の社会化に及ぼす影響」『海外の日本人とその子供たち』トヨタ財団第12回助成研究報告資料 pp.1-15
- 箕浦康子(1995)「異文化接触の下でのアイデンティティー理論枠組み構築の試み—」『異文化間教育』No.9 pp.19-36 異文化間教育学会
- 箕浦康子(1999)『フィールドワークの技法と実際—マイクロ・エスノグラフィー入門—』ミネルヴァ書房
- 箕浦康子(2002)「研究方法論としての解釈的アプローチ—客観的な社会的現実はあるのか?—」『日本における文化接触研究の集大成と理論化—構築主義的文化接触研究に向けて—』お茶の水女子大学大学院人間文化研究科
- 箕浦康子(2012)「『異文化間教育』研究という営為についての2,3の考察—パラダイムと文化概念をめぐる—」『異文化間教育』第36号 pp.89-104 異文化間教育学会
- 宮副ウォン裕子(1998)「自律的日本語学習者支援のためのネットワーキング・ストラテジー」『日本学刊』2, pp.1-15 香港日本語教育研究会
- 宮副ウォン裕子(2003)「多言語職場の同僚たちは何を伝えあつたか—仕事関連外話題における会話上の交渉—」『接触場面と日本語教育—ネウストプニーのインパクト—』 pp.165-184 明治書院
- 宮副ウォン裕子(2005)「香港の中国語紙に見られる日本語の影響」『社会言語科学会第15回大会論文集予稿集』 pp.112-115 社会言語科学会
- 宮副ウォン裕子・マギー梁安玉(2006)「多言語話者のコード選択の要因—香港の中英日マルチリンガルの社会言語的プロフィール調査—」社会言語科学会第17回大会論文集予稿集 pp.48-51 社会言語科学会
- 村岡英裕(2002)「在日外国人の異文化インターアクションにおける調整行動とその規範に関する事例研究」『接触場面における言語管理について(II)』千葉大学大学院社会文化科学研究科研究プロジェクト報告書第38集 pp.115-126 千葉大学大学院人文社会研究科
- 村岡英裕(2006)「接触場面における社会文化管理プロセス」『日本語教育の新たな文脈』 pp.172-194 アルク
- 森住衛(2004a)「<英語が使える日本人>育成のための戦略構想(行動計画)—その意義と問題

- 点一」『桜美林シナジー』第2号 桜美林大学大学院国際学研究科
- 森住衛(2004b)『単語の文化的意味－friend は「友達」か』三省堂
- 森住衛(2011)「大学英語教育の考え方」『大学英語教育学－その方向性と諸分野－』(英語教育学体系)第1巻 pp.3-11 大修館書店
- 山川智子(2006)「「複数言語主義・使用・状況」の可能性－欧州評議会の動向とヨーロッパ・スクールの試み－」『WEB版リテラシーズ』第3巻1号 くろしお出版
- 山川智子(2007)「『複数言語主義』・使用・状況の可能性」『リテラシーズ 3－ことば・文化・社会の日本語教育へ』くろしお出版
- 山川智子(2010)『複言語・複文化主義とは何か－ヨーロッパの理念・状況から日本における受容・文脈化へ－』くろしお出版
- 山本雅代(1991a)『バイリンガルその実像と問題点』大修館書店
- 山本雅代(1991b)「バイリンガリズムと誤解」『言語』Vol. 20 No. 8 特集:日本のバイリンガリズム
- 山本雅代(1996)『バイリンガルはどのようにして言語を習得するのか』明石書店
- 湯川笑子(2000)『バイリンガルを育てる』くろしお出版
- 李麗麗(2011)「中国人大学院留学生のアカデミック・インターアクションに関する調査－正統的周辺参加から十全的参加への過程の分析と考察－」『桜美林言語教育論叢』No.7 桜美林大学言語教育研究所
- リャン・ソニア著, 中西恭子訳(2005)『コリアン・ディアスポラ－在日朝鮮人とアイデンティティー』明石書店
- 劉京宰(2006)「グローバル朝鮮族経済発展戦略」『朝鮮族のグローバルな移動と国際ネットワーク－『アジア人』としてのアイデンティティを求めて－』アジア経済文化研究所
- Lave(レイヴ), J & Wenger(ウインガー), E. (1991) 佐伯胖訳(1993)『状況に埋め込まれた学習－正統的周辺参加』産業図書
- 王柯(wang ke)(2001)「『少数民族』から『国民』への道程－現代中国における国民統合という視点から－」『アジア研究』Vol.47 No.4 pp.39-62 アジア政経学会
- 王柯(wang ke) (2005)『多民族国家中国』岩波書店

<中国語文献>

- 包尔汉(1961)「少数民族语文工作的巨大成绩(少数民族語文工作の多大な成績)」『中国語文(中国語語文)』第3号 pp.6-8 中国語文杂志社
- 朝鮮族簡史編写組(1986)『朝鮮族簡史(朝鮮族歴史概観)』延边人民出版社
- 陈恩泉(1999)『双语双方言与现代中国(二言語・二方言および現代中国)』北京语言文化大学出版社
- 崔吉元(1990)「谈延边的双语制(延辺の二言語制度を論ずる)」『中国少数民族双语研究论集』pp.107-117 北京民族出版社
- 崔吉元(1993)「朝鮮族学校汉语文教学问题(朝鮮族学校における漢語文教学の問題)」『中国

- 少数民族语言文字使用和发展问题』中国藏学出版社
- 关辛秋(2001)『朝鲜族双语现象成因论(朝鮮族の二重言語現象の成因論)』北京民族出版社
- 姜永德(1992)「延边的汉语教学」(延辺の漢語教学)『朝鲜族中小学汉语文教学四十年经验论文集』东北朝鲜民族教育出版社
- 金炳善(1992)「延边朝鲜族的双语教育(延辺朝鮮族の二言語教育)」『民族语文』第2期 pp. 75-80 延边人民教育出版社
- 朴昌昱(1987)「试论朝鲜族的迁入及其历史上的问题(中国朝鮮族の移住及び歴史上の問題を試論する)」『朝鮮族研究論叢』黒竜江省朝鮮民族出版社
- 朴桂燦他(1989)『延边朝鲜族教育史稿(延辺朝鮮族の教育史稿)』吉林教育出版社
- 孙春日(2009)『中国朝鲜族移民史(中国朝鮮族移民史)』中华书局
- 吴宗金(1997)『中国民族法学(中国の民族法学)』法律出版社
- 徐基述(1989)「关于建国前黑龙江朝鲜族的国籍问题初探」(建国以前の黒龍江省朝鮮族の国籍問題に関する一考察)『黑龙江民族论刊』黑龙江朝鲜民族出版社
- 徐基述主编(1990)『黑龙江朝鲜民族(黒龍江省の朝鮮民族)』黑龙江朝鲜民族出版社
- 张爱英(1994)「大力发展民族教育事业促进民族共同发展(民族教育の発展と民族共同発展の促進を目指して)」『民族教育研究』第4期
- 中共中央文献研究室(1985)『关于建国以来党的若干历史问题的决议注释本(建国以来共産党の歴史問題の決議に関する注釈本)』人民出版社
- 中国社会科学院语言研究所词典编辑室(1978)『现代汉语词典(現代漢語辞典)』第1版 商务印书馆
- 中国社会科学院语言研究所词典编辑室(1983)『现代汉语词典』第2版 商务印书馆
- 中国社会科学院语言研究所词典编辑室(1996)『现代汉语词典』修订版 商务印书馆
- 周定一(1957)「语言科学在党的领导下向前迈进(共産党の指導の下で前進しつつある言語科学)『中国语文』第9号 pp.6-9
- 莊永明(訳)(2007)『欧州共同語文参考架構(欧州共同参照枠)』高雄:多媒体英語学会
- 延辺人民出版社編(1986)『朝鮮族簡史(朝鮮族簡史)』延辺人民出版社

<朝鮮語文献>

- 남성일, 방학철, 임창길(1995)『중국조선어문 교육사(中国朝鮮語文教育史)』동북조선민족교육출판사(東北朝鮮民族教育出版社)
- 북경대학 조선문화 연구소(1995)『언어사(言語史)』북경민족출판사(北京民族出版社)
- 북경대학 조선문화 연구소(1997)『교육사(教育史)』북경민족출판사(北京民族出版社)
- 沈希燮·李允奎(1990)「연변에서의 조선어방언 분포(延辺における朝鮮語方言分布)」『조선학연구(朝鮮語學研究)』第2号 pp.70-93
- 연변조선족자치주 개황집필소조(1984)『연변조선족자치주 개황(延辺朝鮮族自治州概況)』연변인민출판사(延辺人民出版社)

- 全学锡(1991) 「중국에서의 조선어의 발전과 연구(中国における朝鮮語の発展と研究)」
『연변조선족자치주 창립 40 돌 기념출판(延辺朝鮮族自治州創立 40 周年記念出版)』
pp.69-92 연변대학출판사(延辺大学出版社)
- 중국조선족 교육사 편집위원회(1991) 『중국조선족 교육사(中国朝鮮族教育史)』
동북조선민족 교육출판사(東北朝鮮民族教育出版社)
- 중국조선민족 발자취 편집위원회(1993) 「중국조선민족 발자취
총서 7(中国朝鮮族民族足跡叢書 7)」 『풍랑(風浪)』 북경민족출판사(北京民族出版社)
- 중국조선민족 발자취 편집위원회(1994) 「중국조선민족 발자취
총서 6(中国朝鮮族民族足跡叢書 6)」 『창업(創業)』 북경민족출판사(北京民族出版社)
- 崔允甲(1994) 『중국 조선 한국에서의 조선어차이에 대한 연구(中国・朝鮮・韓国での
朝鮮語差異についての研究)』 연변대학출판사(延辺大学出版社)

<英文獻>

- Conklin, N.F. & Lourie, M.A. (1983) *A Host of Tongues: Language Communities in the United States*, New York: The Free Press.
- Cummins, J. (1991a) Language Development and Academic Learning. In Malave, L. & Duquette, G. (eds.) *Language, Culture and Cognition: A Collection of Studies in First and Second Language Acquisition*. Clevedon, Philadelphia: Multilingual Matters. pp.161-175
- Cummins, J. (1991b) Interdependence of First- and Second-Language Proficiency in Bilingual Children. Bialystok, E. (eds.) *Language Processing in Bilingual Children*, Cambridge: Cambridge University Press. pp.70-89.
- Cummins, J. (2000) *Language Power and Pedagogy: Bilingual Children in the Crossfire*. Clevedon, England: Multilingual Matters.
- Cummins, J. (2001a) *Negotiating Identities: Education for Empowerment in a Diverse Society*(2nd edition), Los Angeles: California Association for Bilingual Education.
- Cummins, J. (2001b) Bilingual Children's Mother Tongue: Why is it important for education? *Sprogforum*.7 (19), pp.15-20.
- Landry, R. & Allard, R.(1991) Can Schools Promote Additive Bilingualism in Minority Group Children? In Malave, L. & Duquette, G. *Culture and Cognition: A Collection of Studies in First and Second Language Acquisition*, Clevedon: Multilingual Matters, pp.198-231.
- Landry, R. & Allard, R.(1992) Ethnolinguistic Vitality and the Bilingual Development of Minority and Majority Group Students. In Fase, W. Jaspaert, K. & Kroon, S. (eds.) *Maintenance and Loss of Minority Languages*. Amsterdam/Philadelphia:

- John Benjamins , pp.223-251.
- Landry, R. & Allard, R. (1994) Diaglossia, ethnolinguistic vitality, and language behavior. *International Journal of Sociology of Language*, pp.15-42.
- Wagner, E. W. (1951) The Korean Colony in Manchuria and International Rivalries In Northeast Asia, Unpublished M. A. Thesis, Department of History, Harvard University.
- Wong Fillmore, L. (1991) Second-language learning in children: a model of language Learning in social context. In E. Bialystock (ed.). *Language Processing in bilingual children*, Cambridge: Cambridge University, pp.49-69.